

【福島大学むらの大学アーカイブ 15】 【大熊 Chapter 3】

泣く人がいることを忘れないでほしい

根本常子さん



【インタビュー日時・場所】

第1回インタビュー 2023年10月9日・根本さんご自宅

第2回インタビュー 2023年11月22日・根本さんご自宅

【聞き手】

人間発達文化学類 亀岡莉名 経済経営学類 齊藤有沙

共生システム理工学類 泉田晶斗

担当教員 鈴木敦己 実施協力 佐藤亜紀

プロフィール

昭和14年、11月16日に大熊町の夫沢に生まれた。現在84歳。

太平洋戦争を幼児に体験。震災時は石川県の金沢に避難し、

2017年から現在まで、福島県いわき市に住んでいる。

【第1回インタビュー】

—自己紹介をお願いします。

根本：根本常子です。昭和14年11月16日生まれです。84歳になります。生まれは大熊町の夫沢で生まれました。

—覚えている限りの一番古い記憶を教えてください。

根本：そうですね。私の兄がちょっと身体障害者で生まれまして、私が根本家を継ぐようになったんです。そしてお父さんは亡くなるわ、お母さんは出ていったんですよね。出ていったのにもいろいろ事情あったんでしょうけどね。それで、私の父親の兄さんというのは、いわき江名でね、小学校の先生をしてたの。奥さんも江名で先生。あの祖母と、兄と私ではかわいそうだからと言って、夫沢に帰ったんです。そして熊町小学校の教員をしてた。お婆さんのほうは中学校で、おじさんのほうは小学校。だから一番覚えてるって父は5歳の時、亡くなったからね。全然、覚えはないんですよね。あの頃は、みんな結核でね、今のがんみみたいなもんでね。あの父の兄弟8人、女2人と男が6人。それが、みんな結核で女2人、その江名にいたおじさんは元気だったんです。夫沢に帰った育ての親には子どもに恵まれず私たち兄妹を実子の様に育てていただいて感謝しています。

—戦争当時の暮らしの様子を教えてください。

根本：戦争の時はね、あの防空壕といって、穴掘ってね、そこに木を立てたり、板をめぐらしたりしてね、外から見えないようにして。うしろが、飛行場といってね、陸軍の練習機あったんですよね。すごく大きなところでね、そんなのは覚えてるんですけど。うちの辺、B29というのかな。飛行機、飛んできて。私は子どもだから、そんなに、怖いという感じは受けなかったね。防空壕は根本家用に一個。誰が掘ってくれたんだか、そんなの全然分からないんだよね。あと、うしろがね、川なのよ。そこにね、田んぼに水を引くのに、トンネルみたいにね、隧道(ずいどう)といってね。そして水を引いたんだよね。だから、そこにも逃げてきたね。みんなね。

—戦争後はどのような生活をしていましたか。

根本：戦争終わって、すぐ、半年後に、小学校に入ったからね。その飛行場といって、私らよく小さい頃は遊びに行ったのね。もう、戦争が終わった後はがれきで何も無いよ。何も無いけどね、爆弾落ちたところが、みんな、すり鉢みたいになって。そんなで、子どもの頃、あそこに野イチゴを採りにいったり、あと山ブドウを採りにいったり。

そして、私は偏食がひどくてね、もっとも食べるものもなかったんだね。みそ汁かけご飯が大好きで、育ての父親は、こんなでは駄目だからと言って、ヤギを飼ってね。そして乳を搾って、沸かして飲ませてもらった。だから今の自分があるんだと思って、感謝。あとね、キュウリだの、ナスだのは採ってね、みそつけて食べたりしたけどね。家には畑も田んぼもありました。栽培漁業センターに畑と草地があったんだよね。あの栽培漁業センターができるので、強制買い上げになったんですけどね、海のそばの。東電までも2キロくらいかな。そして、畑や田んぼは作ってもらってたね。農地開放というのかな、そんなので引っかかるからといって、自分ちでつくらないとみんな取られちゃうから、小作農さんのほ

うにお願いして返していただいた。うちで作った田んぼは1町7反8畝といったかね。畑もいっぱいあったのね、昔からの農家だからね。

—小さい頃はどんな遊びをして、どんなものを食べていたのか教えてください。

根本：遊びというと、うしろの川に行つてね、あの魚を捕ったりザリガニを捕ったりね。カジカという魚はね、小さな岩を開けると、卵を産んでるの。卵、産んでつから、絶対そこからは逃げようとしなのよ、守つてるの。それを手で捕つてね。岸と、その川との間に手を入れるとね、フナだウナギだのね、そんなのも捕つた。アユだけは捕れなかつたね、逃げ足すばしこくて。いるけれど捕れなかつた。で、冬になるとね、こういう田んぼに水をかける濠、そこをスコップ持つていって、泥を上げるとね、そこにドジョウがいるのよ。そんなドジョウ捕りもしました。家族の人はおいしうって食べてたね。おいしいも何もね、食べるものがなかつたからね。

家の門口もこの間、2、3日前、行つてきたんだけどね。ポーポーになつて、もっと奥行きがあつたのに、ないなと思つて見てきたんだけどね。その両方にカボチャを植えて、そして柵をつくつて、あの頃のカボチャはおいしくなかつたんだね。今のカボチャが一番。あと、サツマイモも植えてね。栽培漁業センターの辺だね。そして、それは食べたり貯蔵をしておいたりして。そんなやつて、暮らしました。昔のカボチャはおいしくなかつた。カボチャでも何でも、甘くなかつたね。ええ、今は改良されてね。おいしい、本当に。お菓子食べてんだか、カボチャ食べてんだか分からないぐらい、おいしい。

—海の近くではどのような生活をしていたのか教えてください。

根本：海はね、あの海が干潮になるとね、ナタ鎌、持つていって。岩にこんな長い、カラス貝なんて、それがいっぱい、ついでるの。それを取つてきてね、きれいに洗つてみそ汁にして食べたりして。あと、カキ貝なんていうのもあつたね。干潮で水が引けると水たまりができるでしょう。そこに足を入れて、ヒラメいたんだね。もう、こんな小さいけどね。

あとは小学校に上がつてからだね、2軒で船をつくつて。そして、その船を海まで、ずっと枕木そろえて行つて。大橋といつて、栽培漁業センターに行く、あの橋、あそこから進水して。そしてホッキ貝を主に捕つてきたね。で、ホッキ舟が朝早く行つて、3時ころになると揚がつてくるのね。子どもで力なんてないんだけど、ロープを引っ張るとね。ご褒美につてホッキいただくの、両手に。それをね、今度、石で割つて海の水で洗つて、そして食べたんだ、そのまんま。そんなこともしました。だから元気なのかもしれない。今の人にはね、ここに落つこつたつて汚いって食べないでしょ。私らそこに落つこつたのだから、こつやつて拭いてね、食べたもん。それでね、あの松ヤニといつてね、マツの木からヤニが出るんだよね。あれを取つてきて、今みたいに缶詰の缶なんてなかつたから、それをホッキ貝に入れて火のそばで溶かして、それを布で絞つて。そして、出た脂をガムにして。

—学校帰りの様子や思い出に残つてゐることはありますか。

根本：あと、学校帰りというのはね、真つすぐは帰つてこなかつたね。山道を通つてね。もう少し過ぎるとね、カワラナシといつて、小さい実なんだけど。それが、霜降る頃になると、熟して。甘酸っぱいの。そんなのを食べたりね。今みたいな高級なことはできなかつた。それのほかにはヨツヅミだのね。学校からうち帰る時は仲間内とか、みんな仲間いるんですよ。長者原といつて、2区。私らのところは

1区だけだね、2区の人もいたしね。サガリッコっていう赤い実なんかも食べたね、赤くて甘い。何せ、食べられるものは何でも食べたもんね。夫沢の海で、塩焼きしたの。こういう鉄板に、あの海の水をくんできて、あの頃はバケツなんてなかったからね。手桶でくんできて。それを、火をたいて煮詰めて、塩にするんだよね。その今の原発あったところでも、そういうことしてたね。そして、あれ売りに出したんでしょうね。そういう農家のことって、あんまりしなかったのね。農家は私が、あの高校出てから、兄貴と2人でね、農家やってたんです。

—通っていた学校について教えてください。

根本：小学校は分校あったのね、夫沢分校。そこに、あれは4年まで近かったから、3年まで私は行って。4年から本校に、熊町に通ったんだよね。中学校は熊町中学。高校は小高、小高までは大野から汽車で。3年小高に通った。

—ご結婚されてからの生活はどうでしたか。

根本：私遅かったのよ、30歳。男ばかり3人生まれた。私が農業をやりだしてからは、兄貴と2人で。田畑耕して来ました。

—住んでいた家の間取りを教えてください。

根本：配置は覚えてますよ。ここに、こう門口があつてね。門口は長かったのよ。そして、ここに大屋があつて。ここに昔ね、隠居屋があつたんだよね。隠居屋って。ここに甘柿の木があつたの。それが枝によって渋いの。そして、ここに物置あつて。で、こちに蔵あつたんだけど、ここに蔵つくって。こんなふうだね。うしろのここ行くと池があつてね、川があつたの。物置の前に、かま屋といって、ご飯炊くところがあつたんだね。で、ここんところは鶏小屋があつたの。

—古い蔵はどうされたんですか。

根本：古い蔵はね、すごく壊れてたから、ここにあつたんだけども。私の代になってから、こちに移したのね。今もあるけども。あと、この蔵建てる前に、お風呂場。昔はね、お風呂場とトイレとあつたんだよね。昔は寒いときはトイレなんかも大変だったんだよ。外に行くからね。37年に物置できて、38年に母屋をつくる。

—前のおうちでの暮らしはどうでしたか。

根本：今でも夢に見るね。72歳まで暮らしたね、夫沢。お墓参りしながら、お墓といたって、うちのほうは土葬なんだよね。そして、それを掘ったんだけども、土にかえっちゃってるの。だから、そこを、お墓参りしようと思ったの。そして、じゃあ、うちにも回ってみっか、なんて。はんこ押すのが遅いから、うちもまだあるのよ。そしたら、ちょうど軽トラが出てきて、うちから。「旦那さん、何かあつたんですか？」と言ったら、イノシシをね、ここに、わなを仕かけたから、だから捕れてっか何だか見にきただ。それと餌やりにきた。ここで8匹、捕ったんだよ、なんて。

—学生時代の遊びを教えてください。

根本：男の子はね、ビー玉なんて、やってたね。あとペッタ（めんこ）。ペッタと言って、こういう、まるこいの、こんな小さいのから大きいのから、あるんだけども。この置いてあるのを、こう裏返しするんだよね。つくったんじゃないくて、売ってて。だから上手な人はね、いっぱい持ってるのね。それをね、ひっくり返すに、あの学生服着てるでしょ。あれの前ボタン外して、その風を招くように、こんなやって、やってたね。女の子は小学校の頃まで、おはじき、やってたかね。

—大きくなってからはどんなものを食べていたのか教えてください。

根本：私ら大きくなってから、飛行場という、原発のとこね。あそこをね、こんなマツの木植えたってね。小さいんだよね、育たない。そこにはアミモダシ（アミタケ）といって、キノコいっぱいでて。それをね、あの肥やし袋を持ってって、そこに採ってくる。朝早く行って。それは大きくなってからだね。おいしいよ。大根おろしで食べる、ナメコの大きいみたいなの。ハツタケだのね、出たんだよね。ダルマシメジとかね、マツのところに出て。これを採ってきて、きれいに洗って、そして沸騰したところに入れて、ゆでておくのね。それを今度ね、昔は、おしょうゆは一斗だるだったの。塩をまぶしてたるに漬けて、その上に私のうちでは俵編んで。その両脇に、まるこいサンタラでふたをして、そして米をもぐんねえようにしたんだよね。そのキノコを入れたたるに、その上から重しかっておくと、いつまでも置けるのよ。それをお客さん来た時に、2日くらい前から塩出すのに、水につけておいて食べたの。だから保存食って感じだね。

あとは昔、サンマに塩まぶしてね。サンマなんて安かったからね。やっぱり塩に漬けておいてね。けども、あんなやって食べたから、脳溢血の人が多い。あんまり塩分とりすぎだからな、昔はね。

—原発ができた頃の何か印象など、何か覚えている話がありますか。

根本：うちのばあちゃんは社会的な人だから。教育委員をやって、教育長をやったんだよね、大熊町の。そして、あの原発反対の人がうしろについて、うちのばあちゃん（根本ハツノ）はテレビで原発反対と言った。昭和40年ころだから、もう原発は決まってたんだもんね。昭和45年に稼働してっからね。そして、テレビ出てうちに帰ってきて「常子な。おれは年寄りだから死んで行くからいいけど、孫子の代に困るから反対すんだからな」って言われた言葉が今も頭にあるね。反対した人がいたの。俺らのハツノ先生が反対したって駄目だったもんな。まず社会的な人だったな、あのばあちゃんは。

—原子力発電所に反対の人はやはり多かったのですか。

根本：あれはね、農家というのはね、田んぼとか畑やって、そしてそれが終わると今度、出稼ぎに行っただよね。よその県に。だから、そういうふうな出稼ぎしなくなると東電が来たということは、みんな喜んだんでない？別にばあちゃんが原発に反対してるからと言って周りからどうこう言われて生活しにくいなんてことはなかったね。でも、反対してても職があるでしょ。そのために両手を挙げて反対ということは言われないね。立場的に。ただ、農家にしてみれば、よそに働きに行くことない。そして、ちょっと農家でも、あそこの東電にね、土地ある人なんていたでしょう。だから、強制買い上げみたいになって。それを今度、裕福になって、そんなことはあったね。

—土地の強制買い上げについてはどのように考えていましたか。

根本：うちでは、東電の土地はなかったから。ただ、ばあちゃんの言うのは本当だったなど。それでなくてもね、みんな集まると、東電が爆発したら、もろともみんな死ぬんだからなんて。そんな冗談話してたから。チェルノブイリだって、まだ駄目でしょう。先祖さん汗水たらして築いたものが何もなくなっただもんね。だから私はこうやって避難してきた時、うちに一時帰宅といった時に、一番先に家系図持っていきましたね。

—もし再び原発が設置されるとしたら賛成ですか反対ですか。その理由を教えてください。

根本：反対。どうしてあんなに人間から家畜から何からね、人の住めない悪いもの。金なんて、いらないから、元のさやに。それが私の本心だね。だって、あの先祖様をね、連れて来るのに3日間、（お墓を）掘ってもらったの。ちょうど、あの六尺とって一間掘って、そこに棺ごと埋めるんだからね。それがみんな土にかえると言って、そういう状態だけれども。本当に何と言うのかな。夫沢にも分骨したみたいにあると思うと、うんと寂しい。みんなは連れてこれなかったんだなんて思ってね。

—3月11日の当日のお話を教えてください。

根本：息子は役場にお世話になってたし。そして、私はあの時はスクールバスを迎えにいて、幼稚園から帰ってきたから、迎えにいて。その時、私の家に友だち2人来てたんだよね、お茶飲み。そして1人の人は、薬もらいにいくからって行った。もう1人の男の人は、ずっといたんだよね。2番目の孫が足悪くて金沢に入院してたんで、お母さんが看病に行ってたから孫2人を私が見てたんだよね。そして2時半ころかな。友達が俺もそろそろ働くかなんて言って帰ったから、私も洗濯物を取り込んできて。茶の間に畳んでいたの。そしたらグラグラグラと、「成実ちゃん、地震」と言って、はだしで出たんだからね。そうしてね、べたっと、こう、お尻までべたっとついて。孫を抱いて、「大丈夫なんだから、大丈夫なんだから」って言って。その時、孫は幼稚園の子が1人。あとは学校、小学校5年生で。

息子が時間休いただいて来て、上の孫をじゃあ学校に迎えさ行ってくっからなと言って。学校に迎えにいて、そして帰ってきて。その時はもうシューズ履きで運動着姿でランドセルも何も持ってないような状態だから。今から避難なんだからなと言われて。その避難所に行くのに、今成実が脱いだジャンパーもどこか脱いだか全然分からなくて。そして私の綿入れ着せて、行ったんだけどね。あの役場の隣の福祉センターあったとこ、昔のね。役場の舗装は割れて浮き沈みしてでこぼこ。だから男の人でなきゃ運転できなかった。私ではできなかった。行って、あそこら辺の近場の人、毛布を持ってきてくれた。そして、その毛布を広げて、みんなしてそこに足だけ入れて、そして夜を過ごしたんだ。

そして余震があったから、グラッという、子どもたちは私なんかより行動が早いからヒューンと逃げるんだよね。遅いのは私。朝になって、みんなごはんを食べたら荷物をまとめて外に出てください。外に出たら他県ナンバーの大型バスが5台並んでたんだ。だからバスに乗るにも孫たちがヒューンといいとこ取った。だから3人でそこに座って、「運転手さん、どこに行くんですか？」と言ったら「俺も分からねえ。役場の人に聞いてみな」って。で、役場の人に聞いたって分からない。

そして行く先々ずっと三春のほうに行ったからね、そっちの学校、こっちの施設の大きいところ、みんな満杯で、三春の会館さ行ったんだよね。行ったら、ちょうど、明日のど自慢大会があるって。両方に立て看板があって、花がきれいに飾ってあって。そこに行ったんだけど、地下に行って潜っただけ

んど、地下も寝るとこなくて。そこに二晩いたかな。眠られないから、起きて玄関先に行ってみたの。役場職員は、ずっと並んでジャンパー着て、椅子さ座ったまんま、こうやって寝てるんだよね。あと眠られない人はストーブたいてたから、そのストーブでテレビを見ていたの。そんなやって二晩、そこにいたね。階段の踊り場に3人でね、毛布ひいて寝ただけんどもね、毛布も1枚、かけるのも1枚。そんなで金沢に、嫁さんここに電話したり、長男も金沢に行ってたから、金沢に電話した。お母さん、飛行機でも何でもいいから来て。そんな行かれる状態でねえんだって。お互いにな、元気でいれば、いつか会えるんだからって。嫁は泣くばかりなんだ。

そうしたら、今度は船引で体育館が新しくできてね、移動したんだけど。いやあ、体育館の大きいところも、ずっとみんな人がいて。そこに分けてもらって入ったんだけんどね。入ったら隣の家のうちの人が、おばあちゃんとじいちゃんと孫、幼稚園から帰ってきた。あと、もう1人は学校にいたのかな。そして、うしろの川がドボン、ドボンというから、幼稚園の孫に行ってみっか、海さ。そしたらあのおばあちゃんは、行かないで、修平さん行かないで、行かないでと言ったのを2人で行ったんだって。そうしたら津波が来て、修平さんは、その瑛士君を抱いて逃げたらば転んじやったんだって。それに津波をかぶさったって言ったね。そして、分からなかったんだよね。2日目かな、そのおばあちゃんも一緒にそこに避難したの。それから顔出さなくてはならないかなと思って行って、トシちゃん大変だったねって。あの修平ちゃんは瑛士君のことを離さずに、抱いてるからなと言ったのを、私、そんな言葉しかねえんだよな。

で、6月だか、警察から自衛隊から何から入ったんだよね。あれは5月までは、あの放射能が強くて入れなかった。6月末頃、修平さんと瑛士君はがれきの下になって、あの修平ちゃんは瑛士君のこと抱いて、亡くなってたって。だからね、みんなそれを見つけて、泣いてたって言ったね。

あと、うちの前の人なんだけど、やっぱり栽培漁業センターさ行って。みんな、うちに帰れとかって上司に言われて、帰ってきて。母ちゃん大丈夫かって言ったら、大丈夫だって。じゃあ、もう1回、行ってくっからって言って、津波に遭って。そして、あの川というのは波もずっとその流れに乗っていくだってね。そして、あの川のふちで亡くなってたって。新婚さん間もなかったんだけんどね、そんなこともあったね。

—船引の体育館に行った後は、どういう経緯で金沢まで避難されたんですか。

根本：金沢には2番目の孫が、難病で大野病院から福島医大に行った。そしたら福島医大の先生の説明は、この病気は今、金沢大ですごい研究をしてる。ここの福島医大の先生方もみんな勉強に金沢に行くんですよって。長男もちょうどね、金沢大にお世話になってたから、その付属病院なんだね。そんなで、行ったらばすぐ連れてこいって。そして行ったんだけんどね、子どもが小学校2年の2学期の時からずっと入院だったからね。今はリュック背負って、ここまで来る。

嫁が新潟出身だから、そこの弟が迎えにきてくれた。弟と、その嫁とガソリントク満タンにして来たんだ。ガソリン入れるの持ってきたのに、それ忘れて入れないで行った。その新潟まで今度、私の長男が迎えきて、長男の家に世話になりたくて。嫁さんが妊娠中だと言って。私らが、いたではね、放射能の。だから四国の鳴門、実家に帰ってもらったの。

今度はアパートに私ら3人が入り込んだ。長男息子と4人で生活した。船引には10日くらいいたんだね、8日くらいかな。そして、厚いシートに自衛隊の人がお湯が持ってきてくれて、そこに風呂に入れてもらったの。孫は男の子で5年生だから、隣の旦那さんに「すみません。孫、一緒に入れてく

ださい」と言ったら、「いいよ」と言って。そして入れてもらった。どうすっぺ、どうすっぺと言って、私は毛布かぶって。子どもたちは元気に遊んでるんだよね。友だちがいつから。そうやってね、友だちも私らいた次は知らない人で、次のとこに宿とったんだよね。で、おばちゃん、泊まりにいったいって。じゃあ、お父さんとお母さんがいいと言うなら、いいけども、聞いてみなって言ったら、いいよって言ってくれた。で、孫2人で泊まりに行く。

渡部千恵子先生は目を真っ赤にして、あれ、疲れから来たんでしょね。朝になると、皆さん、体操しましょうと。ラジカセ持ってきて、みんなと体操。一番先、歌を歌ってね、体操して。だから本当あの人の顔を見ると、ありがたかったなと思って。たまたま同じ所にいたんだ、畳の部屋もあったしね。体育館でも新しいからね、いろいろ、できてたんでね。そして、けんちん汁なんて、いただいた時、あの器はみんなあげますからと言われて。どこも水、出るところがないの。トイレの手洗いのとこだけ。そこで食器洗って。新しいからね、きれいだった。息子はね、廃校になった小学校の担当だった。

—金沢に行くこと決めたきっかけは何でしたか。

根本：夜中にみんな寝静まってから息子来て、「ばあちゃん、金沢さ、行ってもらえねべかな」って。私は夫沢言葉で「おら、金沢さなんて行かねえど。おら、夫沢さ、帰るんだから」って。「いや、金沢さ、行ってもらうとな、俺、何の心配もなく仕事できんだ」って言われた。それから今度、一晩考えたな。そうして、やっぱり金沢まで行かなきゃなんねえのかななんて思って。

そしたらお昼、そのけんちん汁の茶わん洗いさ行って来たら、嫁さまと、その嫁さまの弟と来てたの。ちゃんと決まっていたんだな。雅美ちゃんって抱いて、泣いて。その車で、じゃあ、雅美ちゃん、あの一樹だの成実がお世話になったんだから、あそこあそこに、礼言ってきたと言って。で、あいさつして。もう何も買い物も何もできないし。本当に口だけで「ありがとう」と言って。

そして雅美ちゃんの実家の新潟さ行って、一晩泊めてもらって。10日間もそのまんまだから。そんなして、今度は長男が迎えにきてくれて、ちょうど病院で待ち合わせだから、雅美ちゃんも心配したから。今晚は3人で、どこか宿とって休みなって。私は葵の看病するからと言って。でも、あの金沢あたりの市役所は冷たかったね。シーツ2枚に毛布なんてなかったな。あのアパート借りた時、ここが駄目と言うならば、あとは知りませんよって。息子は9月いっぱい辞めて、それまでは来れなかった。もう、こんな家族離れ離れでの生活はもうできないからって言って。なんで今、こんな大事な時に辞めてきてって私は。おばあちゃん、どこか、大熊に近いところに家を借りるっぺと思ったって、借りられねえべしたなんて言って。人生なんて、そんなもんだよ。

みんなは、いいんだよ。何もねえから。山あり谷あり。一息つけば、また何かね、かぶさっていくし。金沢でアパートに入って、そこがちょっとね、6人で住むには小さいからまた違う一軒家を借りてね。そしたらなんだか、息子たちが根張ったみたいで。こういう震災だの、いろんなことあるとね。三春とか船引の体育館だったりとか。金沢のおうちに5年いて、今、いわきで生活、避難を続けられてるけど。他の家族も今まで7,8人も一緒に生活した人が、三つくらいに分かれてるね。

—避難先で、大変だと思ったことを教えてください。

根本：いや。大熊に帰れないんなら、もう、どうにでもなれと思って。そしてね、あの家族の前で泣くことはできないから、大きな公園に行って。休むところもある、そういうところに行って。もう人生なんて、

どうでもいいと思って。でもね、子どもは男ばかり 3 人、孫たちもいるから、その子どもらが一生懸命頑張ってるのに、自分がこんな駄目だなんて思ってね。

そして、一時帰宅で和徳と来るんだけどね。帰りは西に向かう。これ東向かってるんでねえのか、大熊町は東だどって、そんなこと言って笑ったけども。金沢のあの人たちも、最初はかわいそうだ、かわいそうだというその気心からね、優しくしていただいたけども。週刊誌だの何だので被災者は金もらってるって、金いっぱいもらってるんだっぺなって。今度は逆になるもんね。金でねえんだって言いたいんだけどね。ほかの家族は金沢に根張っちゃったけど、こっちに来たかった。そして夫沢がね、あんな強制買い上げでなかったら、あそこに住もうかな、なんて思ってたけれどね。帰れるような状態でもないし。じゃあ仕方ないから、ここで。だけど今、自分がここに住んでみて、8 年目なんだけどね。この畑があっから。そして友だちもいっぱい。やっぱり大熊の人でないと駄目だけどね。

—震災が起こる前までには、どのような訓練をしていたのか教えてください。

根本：年に一回夫沢の公民館に集まって、自衛隊のトラックで大熊町の体育館、中央台のスポーツセンターに行って、そこでいろいろ話を聞いて。そして、その避難の時に必要なものいただいて。そして帰ったけども。地区ごとに分かれてたんでね。夫沢 1 区、2 区、3 区とか、熊川とか。大川原のほうはしなかったんでないかな。夫沢の本当に原発に近い地区のところだけ対象でやってたのかもしれないね。原子力の避難訓練だから津波なんていうのは頭さ、なかったもんね。農家も一段落するような時期にやってたかね。大人だけ公民館に集まって、そして、そこから自衛隊の車で行って、話聞いたり、弁当をもらったり。そこには自衛隊と役場と東電がいたね。

—これからの世代に伝えたい教訓はありますか。

根本：やっぱりね、生活していくには、そんな危険なものはね、なんぼお金になったって持ってきてもらいたくないし。こうやってね、避難して泣く人がいるということを忘れないでほしいね。何に対してもふるさとは思い出すもんね。ああ、小さい時、隣の甘柿を取って食べたな、なんて。こんな年になって本当に行くところもない。若い人ならばね、切り抜けていかれるけど。本当に私らはね、いつ死んでもおかしくないような年だし。やっぱり、ああやってあのお墓掘って、お骨を持ってきたけども、やっぱり土にかえってる、そのお骨だって、あっからね。この間、孫とお墓参りに行ってきたけども、少し草、生いたな。じゃあ、ばあちゃん、そのうち来て、掃除しなければって思って。

私 1 人でないんだよね。みんな双葉郡いっぱいいたからね。うん。だけど、私らはいいほうであってね。うん。それより、やっぱり亡くなった人だの、何人か、いるでしょう。うん。そういうことを考えるとね、やっぱり我慢しなきゃなんねえのかな、なんて思うけどね。

だからね、こういう若い人達に、原子力発電所、危険のあるものを持ってきてほしくないね。なんぼ、お金になる、何だと言ったって。

【第2回インタビュー】

—自分の人生をどう思いますか。

根本：私の人生はね、本当にこんな人生ってあんなのかなと思ったけどね。いま振り返るとね、ああ、自分に与えられた試練と思い頑張ってきた。兄っていうのはね、身体障害者でもどこにでも出てね。推進員の会長をやってみたりね。いろいろね、農協関係にも出て、そして役場にも何か集まりあつと行って。

これはね、避けては通られねかったんだね、私もね。そのために私、婿養子をもらって、それで男の子を3人恵まれて。そんな人生だったね。今は何だか子ども3人いるけども、自分で大きくなったような気して。長男もこの間、4日に来て5日に帰って行ったんだけどね。

「どこに行きたい？」って言ったら、やっぱり夫沢に行きたいって。夫沢に行って、お墓は墓じまいしたけど、そこにはやっぱりもう、土に返ったお骨があんだよね。取れないお骨、持ってこれないお骨。だからそこに花を手向けてきて。

今度うちに行ったらば、イノシシの罠をかけて。孫が来た時に、やっぱり夫沢見たいって言うから夫沢に行ったのね。そうしたら、ちょうどそのイノシシの番の人が門口でばったり会って、何があったんですかって聞いたらば、いや私、ここ、イノシシの担当だから、だから餌を持って来たんだって。ここで8匹捕りましたよって。

もっとも、あの辺もね、何も分からなくなったような。そんなふうでした。

—原発による東電の補償について教えてください。

根本：みんな夫沢にね、畑も田んぼもあったからね。栽培漁業センターなんて装置と畑とあって、昔そこが元屋敷っていうのを聞いてます。栽培漁業センターできる時も、あんな時も強制で、また今度もそうだしね。でも私、なかなかはんこを押すことができなくて。うしろから数えたら早いかなっていうぐらい。やっぱり先祖さんがね、汗水垂らして築き上げたものを私の代になってみんななくすっていうことは、私はできなかったね。随分、環境省ともいろいろやりとりしたけどね。結局はね、あそこはもう帰れない所だし、仕方ないから押すかなっていうような。地上権設定はしない、うん。ここに三男坊が帰って来るって言って楽しみにしてたんだけどね。地上権で残しても、違う所に配当になっかもしないし。自分の土地でなく違う所に。だから固まって、一角にすんでないかな。それがどこっていうことは分かんない。私はもうきれいさっぱりと売りました。どうにもなりません。でもね、ここ、家も畑も幸いしてね。恵まれたから、まあいいかな。

—原発の補償やその時の気持ちについて教えてください。

根本：あのね、なんぼ東電だの国から補償されても、何ていうかね、ありがたみっていうものはないね。こんなお金いらなから元の夫沢に帰れるようにしてって言いたいぐらい。補償もらわないと生活はできないしね。補償ももらったってね、今から夫沢で生活してたら。お金はね、そんなに湧いてはこないけども、贅沢しないで暮らせばなんぼでも暮らせんのよ。私は、息子3人なの。その3人の子が、国立に行けばいいのにみんな私立に行って、そのころはやっぱりね、教育しなくちゃならないっていう気合いも入ってたし。

うちの育ての母親っていうのは福島師範って言って、昔ね、そこを出て教員になった人だから。だから、常子、今からは教育だからなって言われて。そしたら長男がいい見本を見せてくれて、次男、三男

もそれに続いたから、ああ、よかったなと思ってね。そんなふうです。

—放射線のイメージによる風評被害はあったのですか。

根本：ああ、そういうのはあんまりなかったけどね。金沢辺りはね。なかったけども、市役所でも何でも冷たかったね。帰りたい帰りたいって、そんなことばかりだった。

そしてね、先のころはね、金沢の人たちと鶴寿園に私は行ってたんだよね。鶴寿園って行って、今の福祉センター。そういう所に出入りしてカラオケやったり、踊り踊ったりしてたんだよね。だから最初のころは、根本さん、根本さんなんてね、みんな温かく包んでくれたから、まあ、いいよ。それが週刊誌見たって、根本さんら、いっぱいお金もらってんだなって、国から。そんでちくりちくりと、やっぱりね、いじめ。だから私、そういう人のことはもう避けちゃってね。

市役所なんかも、アパート借りっ時ね、うちの2番目の孫が足悪くて金沢に入院してたのね。そんなで、どうしようか、ちょっと遠いななんて思って。市役所で言ってよこしたアパートね、これが駄目ならあとは知りませんよっていう感覚だからね。

そしてそこを借りた時も、シーツに毛布なかったな。福島県の人には温かいかっていうのは分かるね、ああいう所に行ってね。帰りたい帰りたいと思ったって帰れないし。いろいろ勉強になりました。随分涙も流しました。よくまあ、あるなっていうくらい、涙が。

—避難の最中で一番涙が流れたエピソードはありますか。

根本：友達がね、そのころ私は携帯って持ってなかったの。で、嫁が携帯買ってくれただけどね、よくこんなやって私の電話番号分かったなって。もうその時、涙、涙でね、話も何もできないの。夫沢のほうにね、手紙出すとね、来たでしょ、転送されて。だから「常ちゃん、今どこにいの？」って、そういう手紙ももらったしね。いろいろだね。ああいうことがあったから、今こういう所に恵まれたんだかもしれないしね。みんなに感謝だね。こうやってみんな来てくれるから、余計うれしいよ。

—避難先で印象に残っているお話を教えてください。

根本：うん。避難先で印象に残ってるっていうことは、福祉センターにね、慰問の踊りだの、歌う人が来たの。だって私もこっちに、大熊にいた時、養老園慰問して歩いてたから。だから、ああ、これねと思って、マネジャーの人に、これ、踊りは誰に習ってんですかとか聞いたら、今ここ、舞台を片付けたらみんなで食事しますから、そこに来てくださって言われて行ったの。そうしたら、名前なんていうんですか、なんて。根本常子っていうんです、なんて。そして生年月日言ってね。言ったら、根本さん混ざりなよって誘ってもらったのが（活動の始まり）。

そうしてね、土曜日はセッティングって舞台作りに行って、そして日曜日が今度は慰問に行ったんだよね。だから1カ月のうちに土日休みっていう日はなかったね。忙しいから余計よかったんだね。そんなで、楽しく。これ、一番端の（写真）が慰問団の送別会。2番目はカラオケの送別会。この二つは、金沢離れるまでずっと。だからね、数えてみるとね、100近いくらいあったね。そして車もちょうど中古の車買ったもんですから。そんなで、どこにも歩けたしね。

—金沢の人とは今でも連絡は取っていますか。

根本：してます、してます。北國新聞に載ったんだよね。その時たまたま福祉センターに来て、そして、根本さん、もう3月いっぱい福島県に帰んだから、みんなにあいさつして、なんて言われて。長い間お世話になりました、なんて言っていたらばね、ここに新聞記者が来てたんだよね。そしてあとから私のうちを覚えて、そして来てくれたのね。そしたら、それがうちの息子の教え子だったの。

金沢大にいた時の生徒だったの。その人が新聞記者になったんだよね、北國新聞の。そして、根本なんていう名字はあっちのほうには全然ないんだよね。で、子どもに聞いても、学校でそんな根本なんてないって言うね。それで、その男の人は慰問団の団長なんだよね。浅田あきらさん。それで、私が新聞に出たらちゃんと額を作って持ってきてくれたの。あっちに行っても飾っておきなさいよ、なんて。で、私の部屋で踊ってカメラマンが撮ってくれたんだね。なんかね、生活が一転したような。楽しかったね。

—避難先で言われたことを教えてください。

根本：やっぱりね、週刊誌には避難してきた人にはね、いっぱいお金出してるみたいなこと書いてあんでしょ。だから、それを鵜呑みにしてね。私ら避難者にしてみれば、お金でないんだっていうね。生まれ育った所があんなになってね、もう形もないようになったし。だからそういうのがね、寂しかったね。けども、そんなことには一切関係なくね、お金、お金もらってるくせにっていうね。だから、そういう人は言わないでっては言わないで、遠ざけるの。遠ざかって、その人から離れていく。

なんぼ？ 72歳だったかな、避難して来たからね。で、うちの息子が役場にお世話になってたのね。ほんで、夜中、なんか小学校の廃校だなんていう所が担当になって。私らは船引の体育館の、落成したばかりの体育館に、そこに寝る所あったんだけどね。そしたら夜中に来て、ばあちゃん、金沢に行ってくんねかなって。金沢になんて行かねえど、夫沢さ帰んだから行かねえって言って。そうしたら、うちの嫁は新潟の人なのよ。弟を運転手に頼んで、2人で迎えに来た。本当、夢のようだね。本当にあんなことあったっていうのは。

ただ、育ての親はテレビに出てこないかも言ったかもしれないけども、原発反対でした。こんなこと言ったら怒られっかな、うしろに付いた人もいんのよ。そしてばあちゃん、テレビで反対してって言われて、堂々と反対したんだよね。うちに帰ってきた時に、常子な、と。俺は年寄りだから、死んでくからいいけども、孫子の代に困っから反対すんだからなって言われた言葉が、今も忘れらんねえね。

ある校長先生にちょうど会う機会があったんだね、会津で。奥さんは民生委員の時にお世話になった人なのね。そしたら、俺らのばあちゃんが反対した一握りの人だっただなんて言って残念がっていたね。けどそんな代償っていうのがね、それは何にも尽くせぬ、言い表すことはできないね。

—常子さんのお母さまが原発に対して反対していることに関して

周りの人たちはどのように思っていたのですか。

根本：私らも反対だったもの。そんな東電になってね、放射能うんぬんって言ってね。あそこ爆発したらもろとも死んでしまうんだからなって、そんな話もしてたから。笑ってる所でねえど、本当にもろとも死ぬんだからな、なんてね。そして当時から育ての親は反対だったからね。

—今、大熊とかかわる機会はどのようなものがありますか。

根本：ここ、ふるさととおおくま会。亜紀ちゃんも混ざってるけど、そういういろんな集まりがあるんですよ。何ていうのかな、距離をおいて、こっちさ作り、こっちさ作りって、なんぼ？ 7 つくらいいいのか。そういう所に行って話するとね、自分の家族みたいな感じすんだよね。ふるさととおおくま会に行くんだよね。また違う所に行ったりね。ここに来た時は泉までは行ったね。何か家族に入れてもらったような、そういう雰囲気だったもんね。役員会あったらね、月に2回か。

—根本さんが思う大熊の魅力を教えてください。

根本：家族みたい感じ、雰囲気が。こういうことがあったからね。昔はそんなに思わなかったって言えばおかしいけどね。こうやって避難生活したり、そういうことするとね、本当に家族なんだなって思うようになったね。

—大熊の人との新しい交流はありますか。

根本：ああ、いますね。この間、総合検診の時。84歳ですか、なんてお医者さんに言われたの。そうですって言ったの。私は土と友達に恵まれてますから、だからいいんですねって言って。ああ、それは一番いいことですって。土っていうのは、こういうふうに野菜作ってね。そんなんやって。そしてコロナがあったからね、草野公民館が貸してもらえなかったでしょう？ そして、じゃあ、常子さん所、貸してって言われて、ここ8畳二間。そしてね、寒い時は茶の間にテーブルもう一つ持って来て。うちの会の人らはね、みんな面白いから。セーラー服着て、それが合うんだから。本当、楽しいんだよね。ことしはちょっとぎる菊ね、駄目だったけど。この会、辞めたらね、常子さん、このうち貸してって来なくなるなら、やっぱり辞めないほうがいいなって。こんなに野菜だって、1人で食べるにはこんなに足りないんだけどね、持って行きなって言って、にこっと笑ってくれるね。その顔が、笑顔がうれしくて。持って行きな、持って行きなって。

うちにこもってたって、いいこと考えないのよね。だから少しでも出て歩いて。今の楽しみは、カラオケに行くことだね、まねきねこ。朝早く予約して行くんだよね。このごろ覚えちゃって、予約して。でね、2時間遊んで。ウーロン茶の、今は熱いのもらって、1杯ね。そんで2時間遊んで、420円。友達と行ったり、一人で行ったり。まねきねこのみんな、ああ、根本さん来たって、笑って。

うちにいたらね、考えることがね、うしろばかり振り返るようになる。そんではまずいなと思って。やっぱり自分に合ったようなことをしてね。そんなやって遊んでます。

—おうちにいる時にふと思い出すことはありますか。

根本：やっぱりね、夫沢、大熊のことを一番ね、思い出すね。あのころは仕事も、農家の仕事も忙しかったしね。私、内職もしてたのよ。内職ってね、セーター編みなんてしてて。そうして頼まれたの編んだりして。そんなんやっていたから、昔は楽しかった。全てだね。盆踊りに行ったりね。農村公園って行ってね、そこにやぐら建ててね。うちの息子、役場にお世話になってた息子も青年会に入ってたのね。そしたら練習してきて、ここ、玄関開けると、ことしはホーレンだよ、豊年だよっていうんだ。そんなこと言って帰ってきて。あのころは楽しかったね。今もね、負けてはいられないから、自分で楽しみは自分で作らなくちゃと思って。

—夫沢に戻りたいという気持ちの根幹を教えてください。

根本：私のうちは16代続いたのかな。だから、それが私の代でなくしたっていうのは、やっぱり一番先祖さまに対してすまなかったなと思う。だからね、どうにもなんなかったんだね。長い人生になっては山あり谷あり。だけど、自分が80歳になった時、振り返って、ああ、自分の人生は平らだったんだなと思われるようになった。そんだけ年、行ったのかな。そう思うことによってね、何ていうかな、寂しさも何も忘れられっからね。昔のことなんだよね。いっぱい泣いたよ。おばあちゃんもいっぱい泣いた。涙と鼻と、一緒に。

—自分を奮い立たせるものは何だったのですか。

根本：自分に負けたら駄目だから、だから頑張らなくちゃなんない。いつかはいいことあんでないかなと思ってね。つらいことがね、うんと奥深い時はね、喜びもね。私らはね、そんな大きな喜びはいらないの。こうやって一日、ああ、きょうも終わったなと思った時にね、無事に過ごされたっていうのが一番幸せでない？ 朝も目しっかり覚めたならば、きょうも生きていたんだなって。そんなに悩んでばかりいたら自分が駄目になるもんね。みんながお父さん、お母さんにね、育てられてここまで大きくなったんだからね。感謝の気持ちは忘れてなんないよ。

—震災の思いを私たちが忘れないようにするにはどうすればいいですか。

根本：忘れないようにね。ある人間ね、10人、20人じゃなくね、この福島県みんな、この災害に遭ったでしょ。原発でね。だから、やっぱりこういうものはね、持ってきてもらいたくない。そして一時はね、いっぱい働いてお金いっぱいもらったなっていう人もいっけどね、こんななったらば元も子もないでしょ。本当にもうね、そう思った時に、こんなことは二度と繰り返してもらいたくないなって。だから今ウクライナだのあっちのほうでね、ああいう戦争してっけども、なんで目覚めてくれないのかなと思うね。大半は子どもが犠牲になったなってね。将来のある子どもたちが。

どんなことあったって自分に負けては駄目ね。自分に負けないように頑張らんとね。きっといいことがあっから。みんなとこんなやって話できてね、笑って話できるのも、そういう境遇を通過してきたから今があんだなと思って。

—自分の人生が平らだと思えるようになったきっかけを教えてください。

根本：言葉でなくね、自分の生き立ちを考えた時に、山あり谷ありの人生だったなと思うけども、それによって、そういう山あり谷ありだったけども。ああ、自分はこうやって健康な体ももらったし、それを越えることもできたし。だから、これは平らなんだなと思ってね。そう思わないとね、人生本当に、なんで生まれてきたんだっぺなって思うようになってっからね。

みんな、みんな将来のある人たちだからね。自分の進みたい道に進んで頑張らね。本当にいろいろ、過去を考えたらいろいろあった。でも今、今が幸せだからね、幸せと思わなくちゃなんないし、やっぱり先祖さまに感謝だね。

※掲載情報は2023年12月現在のものです。